

「神の御手の中で」

マルコによる福音書 15 章 1 - 5 節

森島 牧人 牧師

主イエスの出来事、つまり主イエスの十字架の死と復活はキリスト教の最も重要な内容です。今日の聖書マルコ 15 章の前半はその意味で大切なところで、主イエスがどのように十字架にかかって行かれるのか、またその中で人間・神の御言葉の内に生きて来たはずのユダヤ人が、神が人間のために送って来られた主イエスをどのような思いで受け止めたのかを知ることになります。

さて、ローマ帝国からそのエリアを統轄するために派遣されていた総督ピラトは、訴状に基づき被告である主イエスに「お前はユダヤ人の王か」と尋ねます。それに対する主イエスの答えは「あなたの言うとおりだ。」でした。この問答を聞いてユダヤの指導者や祭司長らは自分たちの企みの成功に驚喜し、さらに訴えを続けますが、ピラトはその男や人々の言う「ユダヤ人の王」というものがローマの統治下でどんな意味を持つのか分からず、「ユダヤ人の王」を名乗るそのみすぼらしい男に再度尋問します。しかし主はもはや何もお答えにならなかったためピラトは不思議に思ったと聖書にあります。(同 15 : 2 - 5) そこにいた誰もが主イエスの言われた「ユダヤ人の王」の意味を理解していなかったのです。

聖書を読むと、この時人は神の子を神の子として拒絶したのではなく、理由も分からず、ただただ拒絶したのだったことが分かります。そうです、聖書の福音の中心はイエス・キリストの出来事、まさに主イエスの十字架の死と復活でありました。それ故聖書は、神の子が人間によっていかに徹底的に拒絶されたのかを何度も何度も語り、そしてその中で、これこそが神の子の宿命であり、神が義人に求める姿であったと、明確に示しているのです。つまり、ピラトが不審に思った主イエスの言葉とそれに続く《沈黙》とは、主イエスと神との間にのみ必要なもので、ピラトや人々との間のものではなかったのです。

納得の行かないピラトでしたが、彼がそれ以上に気にしていたのは指導者たちの執拗な告発を聞く群衆が暴動へ向かうのではないかということでした。それは一瞬にして彼の総督としての業績や名声を失わせるものに外ならなかったからです。ただその一方で、指導者や祭司長らの中に男への妬みがあることに気づいていた彼は、このまま男を有罪にした後に起こり得る何らかの政治的な災いも恐れていました。加えて彼は無意識の内にこのみすぼらしい男に畏れを抱いたのだったと思われる。迷うピラトでしたが、ここで彼は良い方法を思いつきます。それは祭りの慣例を利用し恩赦という形で一人の男の刑の執行を免除することが出来るということでした。群衆の機嫌を取り、恩に着せて男を釈放する作戦です。しかし群衆は、特赦の対象に主イエスではなく、もう一人の囚人バラバを選び、彼の目論見は全く外れてしまったのです。

この場面でも分かるように、人間は自分にとって真に必要なもの・救いとなるものが何であるかを深く考えず、貧困や抑圧などの身近な問題から短時間で解放してくれる救い主を選びがちなのです。主が五つのパンと二匹の魚で三千人、五千人の空腹を満たされた時、人々は喜んで主イエスを王メシアとして受け入れましたが、その現実的な期待が裏切られたと思ったこの時、彼らは当然のこととして主イエスを捨ててバラバを選んだのです。

扇動された群衆の声に応じてピラトは心ならずも主イエスを兵士に引き渡しますが、このピラトの行動には、人間の無責任がどんな怖ろしい結果を生むかを教えています。つまり神の似姿 (Imago Dei)、自分の不始末に責任を負うことの出来る自由な存在として造られた人間でしたが、それ故に責任を放棄した時には、神への反逆者という恐ろしい罪に陥ることになるのです。創世記の樂園追放の物語がまさにその姿です。

総督ピラトは無責任な罪人としてその名を後世に残しましたが、しかし同時にそれは、主イエスの十字架の死が罪なき方の死であったことをもまた広く後世に知らしめることになったのです。

濡れ衣を着せられたまま、弁明への一切を拒否して沈黙を貫かれる主イエス。その《沈黙》の意味は、主イエス御自身がゲッセマネの園での苦悩に満ちた祈りを通し、預言にあるように「自分は人間の救いのために神の御心に従って神に定められた苦難の僕の道を歩む」と心に固く決めておられたことにありました。単なる王ではなく、人間を罪の支配から救い出すための王・メシアとして主イエスを遣わし、苦難の僕の道を歩ませるといふ《神の御心》が主イエスの沈黙によって成就したのです。主イエスの不思議な沈黙の中に、変わる事のない神の御心の確かさが見えて来るのではないかと思うのです。

(説教要約 羽入田悦子)